

の収入になり、私が長崎にいないでも収入があると考えたのです。

長崎に帰ってから知事さんの奥さんをお訪ねしました。お会いして牛乳店を始める趣旨をお話すると涙を流して聞いておられました。

その翌日です。私が卒業した長崎中学校の校長をしておられた中村安太郎先生から、私に会いたいという非常に丁寧なお手紙を届けていただいたのです。私が長崎に帰ったのを知っているのは親友の安田義貞君と知事さんの奥さんしかなかったのに、中村先生からのご連絡があったのは知事さんの奥さんがお話しになられたものと思われるのです。私は早速学校に行つて中村先生にお会いいたしました。兄と私の学資を出してあげたらこの仕事をやめるかといわれたので学資だけではなく、家の収入にもなればと思うのでやめませんと申し上げると、中村先生は「どんな隠れた後援者があるかわからない」といわれたのでした。その晩です。夜遅く家の門から敷石の上をからからと音を立てて走りこんで来る人があるのです。私の家は門を入ると三十メートル位家まで敷石が敷いてあったのですが、そこを音を立てて走りこんで来る人があったのです。それは私が帰つたことを知つて一人の親友安田義貞君でした。「中根、君は今日学校に行つただろう、君のことが新聞に載つている」といつて「日の出新聞」を見せてくれたのです。中村先生が全校六百名の生徒を集めて私の話をされたということが載つていたので。私は早速翌日から学生らしく袴をはき、きちんとした服装をして一軒々々、牛乳を取つてもらえませんかといつて回つたので